

す。門野君が腹痛といふので恢復を待てば東は白くなり、だんくに明け一時間もする内に門野君も元氣になれば夜も明けた。併し前面の山には雲が這ひ、よぢるが如くまだ一帯に紫色である。しばらく行つて斷崖絶壁の所に来て見れば、萬山皆杉にして朝風が吹いてくる。又行くと天方君と廣田君とが迎に來てくれた。すつと前から茶屋で待つて居ると。元氣を鼓舞して登る。茶屋につけば先の組の者は待つて居るし案内者は一眠してゐる。一服してゐると、茶屋の親爺が「あんのてんぶら」力餅を盆に盛つて持つて來た。てつきり朝食と思ひ込んで食つてゐる先生も御存知なし。後にマニーを請求せられて、口あんぐり。茶屋の親爺に大峯山はどこかと問へば指さして「あの邊ですが雲がかゝつて見れない。何しろ直径七千尺ですから」とすまして言つて向ふに行く。後大笑「海から海拔」と誰かゞ笑はす。案内者が「行場がつかへる」といふので出發する。茶屋には白衣の團體がざわ／＼やつてゐる。大分來て岩があるので山田君筆を以て「大正十一年七月二十七日十三

名、滋賀縣立彦根中學校山岳部」と樂書す。後から團體が來るので大急ぎ、林の中で雨に降られ、前に居る天方君の所に走りつき、合羽を着、大急ぎで上つたり下つたりして百丁茶屋にたどり着くしばらくするご高坂先生等ズツブリ濡れて來られる。皆そろつて朝食をよばれる。まだ百丁と思へば元氣なし。所へ僕等の後より出發した例の團體もつき、大騒ぎして同じく朝食す。此團體はすぐに出發し、我々は草鞋のひもをしめ、用意して百丁茶屋を出發す。案内者はゆく／＼かう注意しますから、「大峯山に昇りますと大峯乞食といひまして地藏さんに錢をやれなんていひますが、無駄です。其の場で注意しますと私共もいやがられますから、今皆さんに注意しておきます」と。雨はまだ降つて居る。ざんくのぼる。下を見れば雲がかゝつて丁度毎の様で一足踏みはづせば死ぬ位だ。平氣で登る内に大きな木が多く枯らしてある。これまでもこれを處々に見つけた。高坂先生が案内者に問はれると大きな木は運搬に經費がかゝつて仕方がないから所有者は根の皮をはぎ、そして枯ら

しておけば獨りでに枯れ朽ちてそれが肥料となる。我々は小滝のかゝつた谷間を幾つも幾つも越してやつと百五十丁の茶屋につく。汗をびつしょりかいてゐる。こゝには大峯ホテルの者が待つて居て、先の案内者と荷物を持ちかへた。しばらく一服又出發す。こゝらの茶屋の男は袴に用ひる様なされではばつちの様な物を作つてはいてゐる。先の案内者は後から來ると言つておいて猶來らず、終に彼の惡計を知る。谷の如く冷い水が流れてゐる。山又山で大難儀。はげしい崖もふみ越へ大天井小天井を後に前に大峯山の巨軀が見ゆる。再び血汐はおどる。この時「テツベンカケタカ」と鳴き続ける聲、此即ちホト、ギスである。此時のうれしさ待ちに待つたホト、ギスの聲を聞いた時のよろこび。

附近紅葉して居る木もあつた。ホテルの者の話によれば九月頃には全部紅葉する。紅葉をとり帽子につけ、やつと洞辻の茶屋に着けば、先鋒組は大分前に着した。皆汗でびつしょりになり風を引いた者もあつた。もう山上まで二十五町だ

のぞきにつく。案内者は帶皮をもつてのぞかせる。膽がちぢまる。岩には何も彫つてゐない。此の時近くに居た行者の一人曰く、「此の像は靈の力で彫られた者で無意味には見はない。所謂靈力によつて見るんです」と。

「ありがたや、西ののぞきに懺悔して、九穴の像を下にこそ見れ」

と歌合せし行者の修業せしと傳わるお龜石に來るこゝにも

「お龜石ふむなたゝくな杖つくな、よけて通れや旅の心客」とよむ。

こゝを昇り竹林院の別院に着し晝食をとる。それをして行場見物と出かける。胎内くどりといふ岩と岩との間を通り變な所を行く。蟻の戸渡りといふ危険さはまる蛭をよち。次は平等石、下を見れば千尋の谷、思はず膽をひやす。併し突き出て居る岩をぐるつと廻るだけの藝。そこで行場の見物も終へて本堂につく。今度こそはと思つてゐたら又一人前拾錢づゝ請求、これはと大驚き本堂は豫期に反して小さかつた。暫く一吹し又下

におりる。道々植物群落を見る。けはしい岩の道を腰をかゞめており、やう／＼草鞋をぬいだ所までやつて來た。下から重い荷を負つた人がやつて來る。實にこれには大きに感心す。此等の人は足を踏みしめ／＼登る。我々は再び洞辻に着し、今夜を過すべき洞川に向つて出發す。これより下り坂にして八十町もすぐ下り、洞川につく。洞川を流るゝ川はすき通つて所々碧によごんで居る。はれた様な足を引きづつて大峯ホテルにつく。又二階が我等の室で、前は例の川に面し我等にはもつたいない位である。着いた時から眼鏡をかけた宿の男が世話を焼いてくれると思つた同縣人の野洲郡の人である。例の精進物でよばれて湯に入り後床につく。

第三日 ふと眼を覺せば矢張り川はせらひて流れて居て涼しい氣が明けた硝子障子より這入つてくる。足がいたむ。そへ先の親爺さんがやつて來て、床をたゝんでくれた。洗面後今度は心配しておつた、精進物でなく、牛肉と玉葱。おいしくよばれる。此は先生の御氣附によるのだ。

り夢心地の中に濱寺をすぎ、住吉につき又電車に京都につき京津大會を見に行く。我が校は准優勝して天王寺の動物園裏に宿を求めて一泊す。温泉に入り新世界を散策して眠る。

第五日 身支度し一時解散す。京阪電車により京都に近い近畿地方に宿を求めて一泊す。温泉に入り新世界を散策して眠る。

り夢心地の中に濱寺をすぎ、住吉につき又電車に京都につき京津大會を見に行く。我が校は准優勝して天王寺の動物園裏に宿を求めて一泊す。温泉に入り新世界を散策して眠る。

第六日 身支度し一時解散す。京阪電車により京都につき京津大會を見に行く。我が校は准優勝して天王寺の動物園裏に宿を求めて一泊す。温泉に入り新世界を散策して眠る。



第四日 翌朝宿をたち和歌山城を見物し、新和歌浦に向ひ、大いに景色を賞し、西國第二の札所紀三井寺に參詣しそこにて晝食をとる。しばらく一服し電車にて和歌山市驛に向ふ。南海電車にの



雜 築

陸上大運動會の記

森 藤 吉 郎

天高馬肥の秋、大正十一年十月三十一日、天長節の佳節をトして、例年の如く陸上大運動會開催さる。この日や微風さへなく絶好の秋日和であつた。今年は來賓父兄の席は皆北側に作られ、大いに廣くせられたに拘らず、日中は蟻の通る隙もない程であつた。貴賓席に井伊伯爵御來臨なされしは幸甚の至りである。四方の觀覽者は場にみち／＼てゐた。本年は競技出場者甚だ多く、従つて番組の數も多いので、一日では終らないかも知れないと心配してゐたが、進行の速きこと實に驚かざるを得なかつた。而して役員諸君の努力により、トラックも正確に作られた所からレコードを知り

得る興味もあたつが、我等記録の人數の不足と、トップウォッチの不完全より正確にタイムを計らなかつたのは殘念である。然し出来るだけ正確に計つた積りだ。

午前九時式後一大號報は朝霧を衝いて天空に轟きぬ。歡喜と野心と元氣とに充ち満ちた我が赤鬼男兒の今年最後の晴の日はかくて火蓋は切られたのである。

第一回 全校體操

手の出しかた足の動きぶり一舉一動皆赤鬼健兒の特風遺憾なく現れ、本日の活動はあり／＼と見られた。

第二回 二百米突競争

一着 安居(選)	二十五秒
二着 北村	
三着 吉田	

第三回 同

一着 米澤	二十九秒
二着 堤	二十九秒
三着 内藤	二十九秒

第四回 四百米突競争

遺憾なく目的を達し得るらしい。

第九回 同

二十八秒 $\frac{4}{5}$

一着 中村	
二着 田中	
三着 浅野	

第十回 同

大鳥

一着 河村	
二着 三和	
三着 小堀	

第十五回 同

伏木

一着 山本	
二着 西濱	
三着 澤田	

第十二回 同

森山

一着 杉本	
二着 松宮	
三着 寺村	

第十三回 同

大橋

一着 右川	
二着 織田	
三着 寺村	

第十四回 同

栗山

一着 松川	
二着 森	
三着 原	

進行あまりに早く、人手不足してタイム計られず時間を記し得ないのが遺憾。

第八回 同

五十七秒 $\frac{2}{5}$

一着 水野	
二着 富永	
三着 楠重	

第九回 同

五十八秒

一着 宮内(選)	
二着 川端	
三着 西澤	

第十回 同

五十七秒 $\frac{2}{5}$

一着 木村選	
二着 橋本	
三着 蓬井	

第十五回 同

六十秒

一着 今村	
二着 辻	
三着 本村	

第十七回 二人三脚競争

五十七秒 $\frac{2}{5}$

一着 山田	
二着 土屋	
三着 田中	

號外發行さるゝこと早や二回、この調子で行くぞ

一着 和田 植田 三十六秒
二着 橋口 北村

三着 西崎 吉田

第十五回 六百米突競争

一分三十四秒

一着 藤本
二着 岩崎
三着 三浦

一着 右川 五十八秒
二着 江龍 一分二秒
三着 古川

一着 北村 二着 赤田 三着 富田

一着 岡崎 二着 森野 三着 春野

北村一周を終らんとするや銃砲轟く。

第十六回 パン食ひ競争

一分二秒

一着 右川
二着 江龍
三着 古川

一着 北村 二着 赤田 三着 富田

一着 岡崎 二着 森野 三着 春野

北村一周を終らんとするや銃砲轟く。

第十七回 一分間競走

三十四秒 $\frac{1}{5}$

二着 鳥居 三着 西村

一着 摂ひも揃つた校内青頭連中

第二十五回 同

一着 吉田 二着 井上 三着 北川

二十九秒 $\frac{4}{5}$ 三十秒 $\frac{1}{5}$ 二分十七秒 $\frac{1}{5}$

こゝらは大人青頭俱樂部出にして案外タイムも早

し。

第二十六回 八百米突競走

二分十秒 $\frac{4}{5}$ 二分十七秒 $\frac{1}{5}$

一着 西村 二着 山本(選) 三着 宮川

一本足の案山子の早いこと驚くべし。練習の苦心

想ひやらる。

第二十八回 二百米突競走

一着 川添 二着 大橋 三着 宮村

愈々今日競技中の花と呼ぶるマラソン、レースは來れり。走者はかねて我が號外によりて走路を知り、スタートラインに整列をなし、午前九時四十三分銃砲合団に總數四十名（中に三年級以上の選手六名あり）出發す。場内を一周して郡役所女學校前を通り大上川に向ふ。松井先登なり。十時二十分頃街の方よりごよめき傳り、校門の

外旗旌動く、すはマラソンの勇者は來るなり。今

日の榮ある月桂冠果して誰が頭上に落ちんとする

か。

歎呼の聲に迎へられて、勇姿を現はせるは松井なり。トラックを一周する様實にマラソンの走者を懾ばしむ。高く両手を擧げて決勝線に入る。時に十時四十四分三十秒なりき。やゝ時ありて成宮現はる左に勇者の芳しの名をあげん。

一着

松井勝吾(五年選手)

四十一分三十秒

二着

成宮義雄(四年選手)

四十三分四十五秒

三着

宮内光三(四年選手)

四十五分四十五秒

四着

寺村新太郎

四十六分四十秒

五着

川添助二郎

四十七分五秒

六着

武岡勝利

四十九分

七着

勝井勝三

四十九分四十六秒

八着

宮内多喜雄

四十九分

九着

川添助二郎

四十九分

十着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十一着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十二着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十三着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十四着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十五着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十六着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十七着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十八着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

十九着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

二十着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

二十一着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

二十二着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

二十三着

西澤久一郎(三年選手)

四十九分

第三十九回	同	ボール紙に墨ぬりつけた者はばかり。除外する。
第四十回	百米突競争	假面は假面だ、いや心がよく顔にあらはれてゐる。第一番に入つた野口除外され、後より數の方が早い山田第一着となる。
第四十一回	同	除外する。
第四十二回	同	除外する。
第四十三回	百米突競争	除外する。
第四十四回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第四十五回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第四十六回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第四十七回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第四十八回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第四十九回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十回	障碍物競争	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十一年	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十二回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十三回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十四回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十五回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十六回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十七回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十八回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第五十九回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十一年	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十二回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十三回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十四回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十五回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十六回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十七回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十八回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第六十九回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十一年	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十二回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十三回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十四回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十五回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十六回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十七回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十八回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第七十九回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十一年	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十二回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十三回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十四回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十五回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十六回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十七回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十八回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第八十九回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十一年	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十二回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十三回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十四回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十五回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十六回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十七回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十八回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第九十九回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。
第一百回	同	今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。

○點なりき。

第三十四回 四百米突競争

一着 澤井 六十秒

二着 川崎 三十四秒

三着 北村 三十三秒 $\frac{3}{5}$

第三十五回 戴囊競争

一着 富田(義) 四十二秒

二着 富田(内) 四十二秒

三着 家森 四十二秒

第三十六回 バン食ひ競争

一着 正田 四十二秒

二着 某 四十二秒

三着 山田 四十秒

第三十七回 假面競争

一着 杉本 四十秒

二着 圓城 四十秒

三着 桂 一分二十三秒

富田兄弟共に青坊主でこの競争に加り先登を争ひしが人道を知つてゐるのが弟負ける。

人生十中八九はパンに追はれて終る者多し。』とは遁世人の言なり。なるほど運動場の眞中に於てのどんちゃんかんの食ひつき方を見れば合點が行く。

あゝ儲けがたき金よ、あゝ食ひ難きはパンよ。

今年新案の競技である。なか／＼熟練を要し腰がいたそだ。

第五十二回 同

一着 小野 四十八秒 $\frac{1}{5}$
二着 岡崎 四十九秒

第五十三回 兔競争 除外する

一着 那須 二十八秒
二着 日比 二十八秒 $\frac{1}{5}$

第五十四回 二百米突競争

一着 森野 二十八秒
二着 奥村 二十八秒 $\frac{2}{5}$

第五十五回 同

一着 中島 二十七秒 $\frac{3}{5}$
二着 岡崎 二十八秒 $\frac{2}{5}$

第五十六回 同

一着 北村秀 二十八秒 $\frac{2}{5}$
二着 西澤 三十一秒

第五十七回 同

一着 郡田 二十八秒 $\frac{2}{5}$
二着 德田 三十一秒

第五十八回 一哩競争

一着 北村 二十七秒 $\frac{3}{5}$
二着 木村 二十八秒 $\frac{2}{5}$

松井マラソンより引き續いてこの競争に参加
一步よく延びて始終先頭に立ち、約半周の差にて決

勝戦に入る、觀衆感心の目を見張る。

第五十九回 重荷競争

一着 西川 三四四秒
二着 伊藤 三十六秒 $\frac{3}{5}$

倭を大事さうに背負うて走る體實に面白し。

第六十回 重荷競争

一着 一居 四十秒 $\frac{1}{5}$
二着 西崎 三十四秒

第六十一回 盲馬三脚競争

一着 村田 箕浦 四十四秒 $\frac{3}{5}$
二着 片倉 朝比奈 四十九秒 $\frac{4}{5}$

第六十二回 母衣引競争 徐外する

一着 北川 長谷川 岩泉

第六十三回 三、四、五年級選手 競走(四百米)

一着 橋(四年) 五十六秒 得點 五年

二着 宮川(五年) 五十六秒 $\frac{4}{5}$ 得點

三着 西澤(四年) 五年

前日に行はれし競技の各年級の成績左の如し。

砲丸投 一着 橋(四年) 五六年

投球 二着 宮川(五年) 五年

槍投 三着 西澤(四年) 五年

圓盤投 四着 牧野(四年) 五年

走幅跳 五着 青木(四年) 五年

走巾跳 六着 宮川(五年) 五年

走短跳 七着 小林(五年) 五年

得點 一 5 1 5 1 5 2 3 1 5 3 3 5 0

第六十四回 百米突競争

ストップウオツチ故障ありき。

第六十五回 同

一着 三原 十五秒 $\frac{1}{5}$
二着 平塚 十六秒 $\frac{3}{5}$

第六十六回 同

一着 古川 十四秒 $\frac{1}{5}$
二着 北川 十六秒 $\frac{3}{5}$

第六十七回 同

一着 那須 十五秒
二着 垣見

第六十八回 同

一着 后藤 十四秒 $\frac{1}{5}$
二着 岡崎 十六秒 $\frac{3}{5}$

第六十九回 同

一着 小澤 一分三十六秒 $\frac{2}{5}$
二着 中澤 一分三十六秒

第七十回 重荷競走

一着 池田 一分五十秒
二着 山中 一分四十秒 $\frac{2}{5}$

五十二秒 $\frac{4}{5}$ 三着 角田
第七十回 同三十八秒 $\frac{4}{5}$ 一着 西山
二着 竹原
三着 音瀬

これにて晝食となす。時に十一時十五分なりき
煙火の大音響にそゝのかされて來る者續々さしも
に廣い運動場も立錐の餘地もない様になれり。午
後〇時三十分再び戦端は開かれぬ。

第七十一回 尋常小學選手豫選競争

第七十二回 二分間競争

一着 宮内
二着 山本(選)

約四周を終らんとするや號砲鳴る。

第七十三回 障碍物競走

一着 草野
二着 近藤
三着 桶辻

第七十四回 同

一着 笠原
二着 宮内
三着 桶辻

第七十七回 同

一着 奥村
二着 澤井
三着 小野

第八十二回 倒立競走

一着 森安
二着 森保
三着 北村

第八十三回 兔競争

一着 上野
二着 小林
三着 森

何れも大分練習したと見ゆて、倒れず三人共スラ
ーと決勝線に入る。

第八十四回 武裝競走

一着 吉川
二着 竹原
三着 西山

彦中兎さんも手がいたいので、今年は競争者も少
く、前途甚だ不安心だ。タイムの長さも尤だ。

第八十五回 二百米突競争

一着 吉川
二着 竹原
三着 西山

上野早く一番に走つて來たが、周章過ぎて帶革の
端をこめるのを忘れ、ペケ。

第八十五回 二百米突競争

五十一秒 $\frac{4}{5}$ 二着 山田
第七十五回 同三着 桂田
第七十六回 百米突競争一着 德田
二着 伊藤
三着 阿部一着 四依
二着 小梶
三着 西依一着 榊原
二着 藤本
三着 西川一着 桃原
二着 梅村
三着 川口一着 桑原
二着 梅村
三着 西濱一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 赤田
二着 村田
三着 谷重森一着 藤本
二着 村岸
三着 中田一着 赤田
二着 上野
三着 谷重森一着 藤本
二着 村岸
三着 中田一着 赤田
二着 上野
三着 谷重森一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍

妙に倒れるものが多ی。

一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 平塙
二着 原田
三着 江龍五十二秒 $\frac{4}{5}$ 二着 山田
第七十七回 同三着 桂田
第七十八回 同一着 榊原
二着 藤本
三着 西川一着 桃原
二着 梅村
三着 川口一着 桑原
二着 梅村
三着 西濱一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 小川
二着 吉田
三着 西川一着 平塙
二着 原田
三着 江龍一着 平塙
二着 原田
三着 江龍

此時運動場の真中に煙火餘興あり。觀衆をして驚嘆せしむ。時に一時三十五分。

第一着 村田	十四秒 $\frac{3}{5}$	得點 3
二着 廣田	十四秒 $\frac{4}{5}$	得點 2
三着 桂	十四秒 $\frac{2}{5}$	得點 1

第九十一回 同

第一着 富永	十二秒 $\frac{1}{5}$
二着 種村	十四秒 $\frac{2}{5}$
三着	渡邊(四年)

こゝらが本校のレコードであらう。

第七十一回 小學選手豫選競争

第一回	高宮 外村源八	二十七秒 $\frac{1}{5}$
二着 豊郷 夏原幸次郎	二十八秒	
三着 彦西 後藤彌太郎		

第九十九回 來賓競争

(繰り上げて行ひしなり)
來賓競走者九人なりし故三組に分けてリレーをなす。

第一着 春照 伊藤慧	三十秒
二着 高宮 馬場敬三	三十秒 $\frac{2}{5}$
三着 愛知川 豊満洋	

あゝ本日の譽れは何處の小學校に、

第九十二回 三年以上選手競争(百米突)

第一着 富永(五年)	十二秒 $\frac{2}{5}$
二着 小森(五年)	十二秒 $\frac{3}{5}$
三着 西澤(四年)	得點 1

第一着 黃組(山田氏以外二人)	一分二十七秒
二着 白組(北野氏以外二人)	
三着 赤組(名を失す)	

第九十五回 商工學校生徒競争(四百米突)

第一着 林伊三郎	一分三秒
二着 西村常太郎	一分四秒 $\frac{2}{5}$
三着 多河正三郎	

以上は商業生徒にして、工業は中止となる。

第九十六回 高等小學校生徒競争(四百米突)

第一着 松田清次郎(彦根東)	一分二秒
二着 田部信三(彦根東)	
三着 北村利一(北青柳)	

第九十七回 尋常小學校選手決勝競争

第一着 高宮 外村源八	二十六秒 $\frac{1}{5}$
二着 豊郷 夏原幸次郎	二十七秒
三着 春照 伊藤慧	

小田先生、世森先生、本田先生、室谷先生、杉江先生
第一着 小田先生 四十三秒 $\frac{2}{5}$
第二着 世森先生
第三着 本田先生

小田先生の上手なのは感心したが體操教師の室

谷先生の下手なのは驚いた。

寺尾先生、松永先生、西澤先生、小島先生 第二回

第一着 寺尾先生	四十三秒
二着 松永先生	四十三秒 $\frac{3}{5}$
三着 西澤先生	

寺尾先生の廻し方體分熟達したものだ。

以上は商業生徒にして、工業は中止となる。

第九十九回 職員競争

先生も新奇なのが好きと見ゆ、樽廻し競走を行はれることとなつたが、道中長じて半周競争となす。

先生も新奇なのが好きと見ゆ、樽廻し競走を行はれることとなつたが、道中長じて半周競争となす。

第一回

第一百回 優勝者千米突競走(後廻しとなる)

第百回 優勝者千米突競争

一着 松井	五百七秒	一分一秒
二着 西村	一分一秒	五十五秒
三着 川端	一分一秒	一五

始終二年級選手先に立ち約半周一年級後る。
第一百二回 三年以上選手競争一哩

一着 松井	五年五分八秒	得點 3
二着 成宮	四年五分二十三秒	得點 3
三着 藤本	四年	

第一百三回 三年以上選手八百リレー

一着 四年級 宮内木村、澤井、西澤	一分四十三秒	レ 5
二着 五年級 富永、小森、青木、宮川		

三年級棄權せり。

三、四、五年級選手競争に於ける得點を左にあげん。

トライアル競技	五年級	二十四點	二十三點
四年級	五年級	零點	五點
三年級	四年級	三十三點	十點
四年級	三年級	二十九點	十點

依て五年級の優勝となる。

本日最後の名譽ある競争に加はりし芳名を掲げん
第一回 第四回 四百米 木村平
第二回 第五回 四百米 吉川英
第三回 第六回 四百米 川端
第四回 第十五回 六百米 藤本
第五回 第二十六回 八百米 西村
第六回 第二十四回 四百米 江辺
第七回 第五十八回 一哩 松井

第一百四回 総引(三、二、一年)

時に三時十分、例年ならば數萬の觀衆歩を捕へて我家に志さす番位なるも、今年は進行の速さによりドン／＼と立錐の餘地もない運動場につめ駆けで来る者多し。

第一百五回 中隊教練

第一百六回 分列式

分列式を終りて今日三、四、五年々級競争の勝者

五年級に優勝旗を授與されぬ。

校長の發聲で萬歳を三唱し、後じまひをして解散す、時に四時十分なりき。

頭頭の一月桂冠はいづれで。

第一回 普通レース

一着 青 松本組	一コース	三分三十二秒	二五
二着 白 中村組	二コース		
三着 赤 上野組	三コース		

大正十一年五月朔日は彦中第三十五回の創立記念日なり。式後長曾根波止場に於て水上運動大會開催さる。

此の日たるや、四面の山霞をこめ、竹生島・多景嶋・沖島等彦中男兒の奮闘今や遅しと待ち構へ、春陽赫々たる色なく絶好の春日和なりしが、惜むべし、北西の風ありて波穏やかならざりき。

第二回 普通レース

一着 赤 難波組	一コース	三分四十九秒	一五
二着 青 竹村組	二コース	三分四十九秒	二五
三着 白 西村組	三コース		

名譽に輝ける幾旋の優勝旗翻然として翻り、我が端艇部の盛大なる歴史を偲ばして中に人目を引く一竿の優勝旗——そは昨年の八月三日石場の濱に於て開かれし國際端艇大會に獲得せしものなりこの優勝旗を見る者必ず年來の恨の報いられしを悦ぶなるべし。

午前九時三十分號砲一發我が大會の幕は切り落さぬ。九時四十分はやくも用意整ひ、三艇曳舟唐崎丸に曳かれてスタートへと向ふ。あゝ今日劈

第三回 普通レース

一着 青 二コース 三分四十七秒 $\frac{1}{5}$
二着 白 三コース 三分四十五秒
三着 赤 一コース

赤最初より劣勢見るべきものなし。

百米位よりして青白の戦となる。青は漕手の體も大きく、功者揃ひ、白何を以てか抗すべき。ミツドルにて既に青の獨舞台となり、三艇身の差を以て青の大勝に歸す。時に波益強く、風いよ／＼猛り、爲に漕手に異常あるを慮り遂に中止するの止むなきに至る。

時に午前十一時半なり。噫！

第二回 普通レース

天候變じ昨日の影さへなく、風穩かにして湖面

鏡の如し。九時に至り三艇水上に浮ぶ。

第四回 普通レース

一着 青 大橋組 一コース 三分二十秒 $\frac{4}{5}$
二着 赤 音瀬組 二コース 三分二十七秒 $\frac{2}{5}$
三着 白 村岸組 三コース

第五回 普通レース

一着 青 辻組 三コース 三分二拾三秒 $\frac{2}{5}$
二着 白 田井中組 二コース 分四十五秒
三着 赤 川添組 一コース

第六回 普通レース

一着 青 大橋組 一コース 三分二十七秒 $\frac{2}{5}$
二着 赤 富永組 二コース 三分四十五秒
三着 青 竹原組 三コース オミット

青最初より優勢にして勝敗の數は既に決せられる。青はゴールアウトにてオミット、白二着となる。

第七回 普通レース

一着 白 竹中組 一コース 三分二十七秒 $\frac{2}{5}$
二着 赤 松井組 三コース 三十五秒

三艇共に並進すれど、白はその中の白眉にして半艇身を抜き、一艇身を抜く、その間に青赤鷦牛の争を演じ、白悠々追らすゴールに入る。蓋し今日の花形なり。

第八回 獨漕(第一選手)

白赤共オール揃ひ優劣なかりしが、終に白の勝となる。赤の奮闘振りも目覺しかりき。

第九回 倶楽部レース

舵手 整調 五番 四番 三番 二番 艤舡
力石 西依 蓮井 墓 村岸 西山 原田 三分十五秒

毎日或はバック台に、或はボートを湖上に浮べ

て鍛へし鐵腕を示さんと悠々然としてスタートに就く。號砲一發蘚やかなスタート切り、オール水煙を揚げて漕ぎ進む。三分十五秒を以て終に決勝線に入る。

選手諸君よ！彼の翩翩として風にひるがへれる石塲に於て獲取せし優勝旗を再取すべき一大義務あるなり。尙一層の奮闘努力を望む。

第九回 倶楽部レース

一着 白 C D 組 一コース 三分二秒 $\frac{2}{5}$

二着 青 T D R 組 三コース

三着 赤 近鐵組 二コース

赤は近鐵、青は官線、C D は三年の猛者なり。某先生この競争を豫想して曰く「近鐵と官線の競争見すとも可なり」と、はたして近鐵數艇身後れ三年、C D 官線T D R を凌ぐこと一艇身にて勝を得たり。有望なるかな。

第十回 倂樂部レース

一着 白 七星組 二コース 三分十秒 $\frac{1}{5}$

二着 青 ラツバ組 一コース 三分三十二秒

三着 赤 朝日組 三コース

三艇共に猛者連、孰れが勝つとも見ぬざりしが

ミツドルに至りて七星のオール益揃ひ、二艇を凌ぐこと數艇身、本日最良のタイムを以て決勝點に入る。

第十五回 倂樂部レース

一着 青 赤鬼組 二コース 三分十五秒

二着 赤 ストン組 一コース 三分十七秒 $\frac{2}{5}$

全校の巧者を網羅したる赤鬼とストンだけあつて、その競争振り甚だ目覺しかりき。スタートを切つてより双方共オール揃ひ、決勝線に入るまで執れが勝つか全くわからず審判官をして大いに迷はしむ。ストン二秒 $\frac{2}{5}$ の差にて勝を赤鬼に譲りたりとは云へ、其の努力甚だ賞すべし。

第十二回 對部レース

一着 徒歩部 赤 二コース 三分十九秒

二着 武術部 青 一コース 三分三十九秒 $\frac{1}{5}$

三着 野球部 白 三コース

本年は此のレースに連年敗を取らざりし庭球部の影見ゆす、徒步部水上をも走らんと忽然として顯はれ、悠々として三分十九秒の良好なるタイムを以て勝を得たり。左に其のメンバーを示さん。

徒步部 松居。成宮。小島。桑原。竹腰。森。橋。

武術部 小堀。須藤。平田。田井中。宮川。中村。箕浦。

野球部 竹中。吉岡。後藤。牧野。若林。辻。村岸。

第十二回 特選レース

一着 千菊組 赤 三コース 三分三十三秒

二着 富永組 青 一コース 三分四十秒⁴₅

三着 音瀬組 白 二コース

本日普通レース中第二着にして、タイム早きものをして競争せしむ。此の榮を受けし人名を列記せば、

千菊組 千菊。藤堂。田原。成宮。辻。脇坂。若林。

富永組 富永。北川。西澤。平田。藤井。桑原。小堀。

音瀬組 音瀬。須藤。大西。澤井。牧野。森。北村。

第十四回 名譽レース

一着 大橋組 青 一コース 三分二十五秒¹₅

二着 竹中組 赤 三コース 三分三十八秒²₅

三着 辻組 白 二コース

本日普通レース中の優勝者の競争なり。本日中の最大の名譽を得んと皆鉢巻しめて奮戦したれども、勝あれば敗あり。遂に青に月桂冠を授く。

メンバー左の如し。

大橋組 大橋。杉本。的場。草野。古池。野瀬。村田。

竹中組 竹中。松本。伊藤。上野。村岸。下郷。中川。

辻組 辻。上橋。西村。音瀬。井上。千菊。
第一着 藤田組 赤 二コース 三分四十二秒
第二着 茂木組 青 三コース 三分四十八秒

職員レースは毎年興味を以て迎へらる。本年は先生の出漕の少きため來賓卒業生生徒を以て一艇を満たして競争行はる。スタートを切りてより殆んど互格を以て決勝點に近づく。青の艇軸如何に思ひけんオールを離して拍手をなす。一同の笑ひを喚起せり。該先生曰く「余が余裕を示せしなり」とかくて遂に赤勝を得たり。メンバーを擧ぐれば赤（來賓生徒卒業生）

藤田校醫。田井中。須藤。青山。中村。安居。堀口。

青（職員）茂木。藤下。本田。小島。森下。世森。東林。

第十六回 二年級各組レース

一着 乙組 青 一コース 三分三十九秒

二着 甲組 赤 二コース 三分四十一秒¹₅

三着 丙組 白 三コース

前途有望なる二年のこのクラスレースは實に目覺しかりき。タイム又良好なりと謂ふべし。

第十七回 年級レース

一着 五年 白 二コース 三分五秒⁴₅



本會記事

學藝部

本年度學藝部は山本先生を部長と仰ぎ。吾等五名が理事として微力を盡すこととなつた。一体此の學藝部は選手といふものも無ければ、グラウンドといふものも無い。隨つて敵を向ふに鎧を削つて勝負を競ふことも無いから、直接に運動部の様な應援を受けることも少く、校友會諸君との親密の度が比較的に疎くは無いかと思ふ。併し辯士が演壇に立つ時は、運動部選手が或はオールを持ち或はバットを握り或はラケットを把つて、敵に向ふ時と變りは無い、同じく校友會の一員として應援すべきであらう。辯論の必要は今更喋々を要せぬ。諸君は辯士を勵まし、辯論に親しみ、以て學藝部の發展隆盛を期し、吾等の寸志に多大の力添

二着 三年 赤 一コース 三分九秒²₅

三着 四年 青 三コース 三分十九秒¹₅

會は愈々進行して年級レースとなる。四方に起る應援の聲各選手に如何に轟きけん。號砲一發悠悠々とスタートを切り三艇並進してミッドルに至れども青如何にしけん見る／＼二艇身も後に。此時ぞ振へ振への聲四方に起る。白一艇身半を以て年級レースの榮位を占む。四年の後れたるは甚だ遺憾なり。三年甚だ有望なりとす。

斯くして本年の水上大運動會は全く閉ぢ、校長先生の下に萬歳を三唱して解散しぬ。因に年級レースのメンバー左の如し。

五年級選手

力石。西依。村岸。算。川添。西山。原田。

四年級選手

細田。草野。古池。中村。藤井。若松。蓮井。

三年級選手

的場。藤堂。桑原。西村。高木。脇坂。

へ下さらん事を乞ふ。

第一回 學藝會の記

六月一日 短縮授業二時間の後直ちに本年度第一回學藝會を開く。午前十時部長開會の辭を述べる。

一、開會之辭

諸君の各運動部選手に對する熱誠ある應援は、私の深く感激する所である。勿論其の衝に當つた選手の努力奮闘は如何程であらう。只今此の演壇に立たうとする辯士も等しく校友會の一員であり、且つ辯論の選手である。諸君に心から辯士に對する誠意を持つて居たなら、靜肅にして且活氣のある學生的態度を以て傾聽されんことを乞ふ。此が即ち辯士に對する最も熱誠ある應援であらうと思ふ。

二、日本海海戦とスラブ魂 二甲 大谷 義雄

我に大和魂があれば、彼にはスラブ魂がある。彼の敗北は即スラブ魂の敗頽である。併し露人の心底には必ず我に對する敵愾心があらう」と而して大和魂の奮起を促して終つた。熱も相當あつた。

大いに聽衆を笑はす。

九、醉生夢死か煩悶か 三丙 鹿谷 義雄

言々句々人を刺すの感があつた。内容あり熱もあり、天晴れの雄辯。一等賞の譽を贏ち得。

一〇、青葉の笛(獨唱) 一甲 植田廣三郎

音調が高過ぎた。

一一、愛

五甲 上野 文雄

君愛に定義して曰ふ「愛すとは良く知る事である」と又曰ふ「親が子を愛すのは良く子を知るからである。」と内容は見るべきであるが、音聲稍々不徹底。

一二、汽車の中にて

二丙 内藤 信夫

平易な材料を以て能く公徳の眞義を穿つた。

一三、信念無き者は危険なり 三乙 近藤 德三

先づ無難である。

一四、藪入の墓口

一乙 川村 孝三

大喝采を博す。二等賞を受ける。

一五、配所の月

二甲 楠 好雄

滔々として配所の月を説く、雄大なる文學的思想の潛む君にして始めてこの配所の月を語り得るの

三、山陽と岸駒

一乙 正野祐三郎

山陽と岸駒の機智較べ。上出來だ。

四、リンカーンの少年時代 一丙 山本 捨三

リンカーンが貧苦の中に生ひ立ち、遂に米國大統領となる迄の出世物語。可愛い聲で滔々此の偉人を説き そぞろ追慕の念油然たらしむるに不足がない。

五、服 徒

三乙 重森利一郎

君叫んで曰ふ「自己の良心に従へ、良心の指す所自己の欲する所へ進め、之れ眞の服徒なり」と。

六、桃太郎 二乙 寺脇太次郎

鬼が島を征服してから後の桃太郎、所謂桃太郎の殖民地經營策であらう。君冒頭にいふ「近頃は童謡童話が流行であるから皆さんも無邪氣な小供心に歸つて此の話を聞いて下さい。」イエスオーライ

七、活 養 四丙 安藤 學全

プログラムの演題は生と死であつたが、都合により變更した。音聲甚だ不徹底。

八、鍼がらす 二丙 家森 實

態度音聲共に良く、且巧に蛙や鳥の聲を眞似し、

であらう。且音聲朗々語句明瞭正しく雄辯獅子吼の卵か。

一六、笛の音(オルガン伴奏) 一丙 足田 芳夫

上出來であつた。

一七、同情は最高の徳也 三乙 岩泉 清

神はキリストをして同情を愛を叫ばしめ、釋迦をして慈悲と呼ばしめ、孔子をして仁と説かしめた」と。熱あり實もあつた。

一八、今日は一生に一度 二乙 上林 忠雄

沈着にして巧に古歌を引用す。

一九、矛盾 二乙 林 英信

音聲稍々低かつたが、辯舌は健であつた。

二〇、ハーモニカ獨奏 三乙 近藤 文雄

鞋鎗として瀑水のたぎるかと思へば、淙々として忽ち急湍にせゝらぐ。一揚すれば百花爛漫の春の野邊、一抑すれば忽ち紅葉散り敷く秋の林。聽衆は只恍惚として夢見るものゝ如くであつた。二等賞。

二一、信 念 四乙 正野敏二郎

人は弱い。只之を強めるには信念あるのみである

日本軍の強いのは、固い信念があるからである。今、日米或は日英が戦つたなら、軍備の上から當然私は負けをとらねばならぬ。只一つ日本の軍備を補つて是の神州を穢れしめぬものは信念あるのみだ。頗る熱辯を揮つたが、聽衆喧噪の爲、論旨を徹底させることができなかつたのは殘念。

二二、泥棒

一丙 西村榮三郎

早口に而も滑に、泥助の失敗談を話す。聽衆思はず。呵々大笑。

二三、太陽主義の生活に入れ

三甲 寺村新太郎

熱あり、然も論理整然として稀なる雄辯を揮つた。只一つ論旨が漠然たるの感があつた。二等賞

二四、青春

五丙 上野 中

君の血管には紅の血潮が漲つてゐるのだ。感激は實に君の生命だ。

二五、荒城の月

菊(獨唱) 一丙 姉川健次

豊富な音量、巧妙な抑揚、優に魂を奪ふものだ。

二六、大自然

五甲 佐々木 鑿

君曰く「偉大なる活動は偉大なる静肅に源を發す」

三一、閉會の辭

閉會後杉山、佐竹、西澤、藤下の諸先生を煩はし採點の勞をお願ひした。審査の結果は省略する。第一學期中左の三校より辯士の招待に預つたが都合により三校とも辯士を派遣しなかつた。

同志社大學語學部 第八高等學校辯論部
日本大學

三二、開會之辭

二、三流

二丙代表 内藤信夫

今年こそはと思ひしも、又許されず。今回漸く二三校を招くを得しのみ。何ぞそれ貧弱なる吾が校學藝部よ。辯論は辯士のみの辯論に非す。聽衆との努力は以てこの實を上ぐるに足らず、唯これを聽衆に待つのみ。諸君それよく生等が心中を諒せられ、大いに反省せられんことを希望してやます。

第二回學藝大會の記

十月二十日 大正十一年度第二回學藝大會はこ

の日午前九時より講堂にて開かれぬ。今回は部長理事相談し、新企畫として各學級より一名づゝの代表辯士を出さしめ、又他校辯士をも招待せり。こはもとより益々學藝會の實を上げんが爲にしてその好影響を及ぼせしや否やは諸君の既知の所ならん。我部はさきに縣下中等學校辯論大會を本校にて開かんとせしも、聽衆の態度未だ宜しからずして沙汰止みとなりしに、滋賀師範吾が先をとり

沈着にして而も滔々懸河の辯を揮つたが、音聲稍低い感がした。一等賞

二七、人と平和

三乙 振川辰之助

動物は必ず動物性を具へ、常に此の世界を己れの世界にしようとしてゐる。人が動物性を有する限り、人類の平和は實現されぬ。平和は單なる理想に過ぎん。軍備縮少も國際聯盟も、恐らく是の快男子の足下に叩頭するであらう。

二八、天下第一

五甲 野村徳三郎

「天下第一とは天下に必要缺くべからざるもののことである。現代の我が教育界、文學界、宗教界に天下第一の人幾人あるか」と慷慨息ます。

二九、かゝし(獨唱)

一丙 本山 徹

大喝采。

三〇、通俗講話

中村先生

聽衆の待ちあぐんだのも尤だ。一度口を開けば走るはく一潟千里だ。而も話が伊勢百萬長者諸戸清六の出世物語がファイルム式に仕組まれて、時々刻々と廻轉されるから面白い。さしも喧々噪々の聽衆でさへ水をうつた様に静まり返つた。聽衆の

り。この貴き時機を空過し老いて悔ゆとも歸らず

六百の彦中健兒それよく努力せよ。

五、奈良の大佛 一乙代表 河村 孝三

淀みなき玉を轉ばす、辯舌と興味溢るゝ内容に萬堂寂として聲なく、時に起るは啞々の聲のみ。一等賞。

六、自重沈着若年既に將器をあらはす

二甲 松宮 誠一

亂れに亂れし麻の世に、快刀一振天下を握りて三百年の太平の基をきづきし東照公の幼時を述べて凡。

三甲 寺村新太郎

四丙 筒井 清彦

七、國際心の涵養

四丙 青山 正郎

沈着なる態度。健全なる内容。そは君をして君たらしめ、聽衆をしてチャームの淵に沈めき。蓋し雄辯なりと謂ふべし。君よ益々自重せよ。二等賞受領。

九、死して惜まるゝ人となれ 三丙 青山 正郎

練習の不足は遺憾なれど、吾人は君の意氣を愛するものなり。

一〇、立志

一丙 山本 捨三

清き音聲は滿場の喧騒を静めたり。二等賞を贏ち得たる故ある哉。

一一、吾人は如何に學ぶべきか 二丙代表 家森實

一二、吠ゆる犬は眠れる獅子より有効なり

五乙代表 須藤 德成

聲やゝ低かりしは遺憾と雖も、論旨は頗る徹底せり。諸君よろしく眠れる獅子たらんよりは寧ろ吠ゆる犬たれ。

一三、獨唱

五乙 森 純三

Near, my God, to the!

The last rose of summer.

Tramp! Tramp! Tramp!

一四、將來の宗教

一甲代表 二橋 五男

現今の日本青年はこの狹隘なる土地に汲々利を求むるを事とせずして、須らく海外に雄飛すべしと。演題の高尚に過ぎしか、論旨の徹底を缺きしは遺憾。

一五、海外雄飛

四丙 福田 仁志

野邊を飾れる花に論を起して、現代を飾るべき吾人の上に及ぼす。蓋し說き得て完しと謂ふべし。一等賞。

一六、吾魂の發達について

一乙 竹腰 義定

二二、舶來の思想

三乙代表 堀川辰之助

おゝ我が校の勇敢兒、意氣に始りて意氣に終る。

益々今後の發展を望む。二等賞。

二三、野に咲く花よ

四丙代表 野瀬 光三

切なりと謂ふべし。おゝ六百の健兒等よ、忍べ!!

あらゆる苦痛にすべての艱難に。なご喧嘩なることの甚しき。

二四、忍之一字

五甲 藤田 正雄

「忍」之こそ人道必須のものなれ。君が論する所實切なりと謂ふべし。おゝ六百の健兒等よ、忍べ!!

二五、束縛のない生活

三丙代表 鹿谷 義雄

虛偽の生活、不潔の生活より脱して束縛なき文化生活に入れど。

二六、ギター獨唱

三乙 近藤 文雄

玲瓏玉を轉ばすが如き美音。忽然我耳に入りぬ。何處より來りて何處に行くやこの美音。天より來りて天に歸るか。天女の奏づる笛の音か。海底深き龍宮より來りて龍宮に歸るか。乙姫のかき鳴ら

きて以つて如何となすか。

二一、意志を鞏固にせよ 二乙代表 竹中康次郎
鞏の鞏固ならざる家や不安なり。意志の薄弱なる人や憂ふべきなり。

す琴の音か。再度聞きて我チャームの淵より浮び

三度聞きては主目前にあり、荒野を馳る野分の如く、小川に流るゝ清水の如く、或は急に或は徐に上は青き空のみなりき。

二七、權柄より親切へ

四甲 藤井源三郎

文明の潮は權柄より親切へと流る。蓋し味ふべき言ならずや。

二八、現實に即して

四甲代表 角田清八郎

内容の充實は殆んど他に類なかりしも、聽衆の喧騒なりし爲、論旨を徹底せしめざりしは遺憾なり人間生活を成さんには實に現實に即して、而も現實以上に達觀せざるべからずと。

二九、覺醒論

五丙代表 上野 中

この時野次の喧騒その頂上に達して辯士の聲聞はず。時に漏るるは「醒めよ!! 醒めよ!! 迷の夢より醒めよ」と叫べるのみ。

三〇、生きよ永遠に

四乙代表 大崎彌太郎

十字架上の露となりて身こそ天國に歸りつれ、その名は隆々と輝きて世を照らしつゝあり。されば彼は永遠に生くる人なりと。彦中健兒それ永遠に

生くる人たれ。

三一、沈黙の世界

五甲代表 佐々木 馨

沈黙。これなる哉。是なるかな。眞の雄辯は沈黙なりとし、沈黙の中に偉大なる力は籠れるなりと云ふ。蓋し説く所切、雄辯と言ふべし。二等賞。

三二、エスペラントに對する私の考へ

滋賀師範 大野 薫君

三三、徹底せる信仰

比叡山中學 前野寂章君

三四、閉會之辭

理事 森 藤吉郎

閉會後、杉山、古市、上松、佐竹、藤下、森脇諸先生を煩はし採點の勞を願ひし結果、代表辯士の中にて四丙最高點を占め、本日の榮冠はこれに落ちぬ。

武術部

柔道

八幡商業學校來襲之記

大正十一年七月二十五日我が柔道部選手は本校道場に彦根警察軍を迎へ、練習試合を行ふ日頃練りに練りし手並をなんなく顯はすことを得たり成績左の如し。

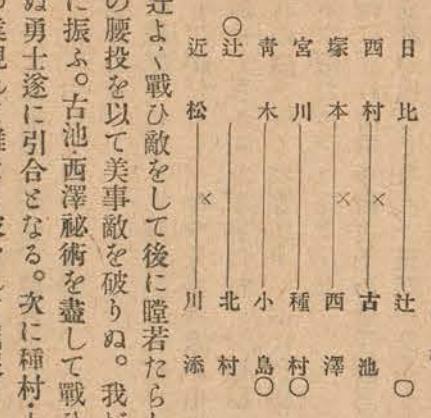
對彦根警察署練習試合之記

しが時來りて引合となる。かくて我軍の勝利となり。四時半終結を告げぬ。(T.S)記

を探り居たる時こそあれ、かの怨ある八商來襲せり。直ちに應戦に決し、六月十八日戦ひの幕は本校道場に於て切つて落されたり。

戦績

八商 本校



先鋒辻よ、戦ひ敵をして後に瞠若たらしめ、彼の得意の腰投を以て美事敵を破りぬ。我が軍の士氣大いに振ふ。古池・西澤祕術を盡して戦ひしも敵も劣らぬ勇士遂に引合となる。次に種村・小島の二人得意の業現れて難なく彼をして屈服せしめぬ。

北村出て奮戦せしが、我が運拙く、哀れ敗北の憂目を見る。御大川添敵將近松共に堂々たる大男彼また老練なる勇士に似たり、互ひに奥の手を出しつゝ激戦し殊に川添獨特の體落を以て敵に迫り

大正十一年八月五日より九日に至る抑も如何なる日なるぞ。炎威赫々金鐵を熔かす夏の日も、寒

武德大會出演之記

威凛烈骨に徹する冬の日も、鍛へに鍛へし技倆を示すべき第二十三回青年演武大會の當日なり。六百の校友に見送られ金龜城を後にして滋賀の浦曲の綠深き大津を過ぎて京都に着きぬ、隆々たる双腕を撫して瀧の如き流汗を拭ひもやらざる柔道部選手の一一行は元氣頗る旺盛、殺氣天に満ちて物凄し。明くれば六日天朗かに氣晴れ、人をして爽快の感を覺ゆしむ。

我等金龜城下に鍛へし腕は鳴らんばかり、今日こそ我等が腕だめし、今や太陽は東の山端に笑める顔を顯はし恵の光を下界に投げ、微風おもむろに稽古衣の裾を吹く我等選手一同に奮勵一番せよと教ふるに似たり。

武徳殿に至れば殿中數百千の選手觀客を以て埋められ立錐の地とてなし。正面一段高き所には總裁宮殿下の御座あり。又貴賓より新聞記者に至る席をも設ける其の外國人席、婦人席、審判席等あり。而して左右兩側には各府縣の選手の名票ありて、居並ぶ選手は鬼をも取り挫がんばかり、用意おさ／＼怠りなし。當日我が軍の戰績左の如し。

× 本校 種村誠一
（磯波中） 堀健治
殊に種村得意の跳腰には相手防ぐに困りしが、敵もさる者、甘く逃げまはり遂に引合とはなりぬ。

× 本校 竹原正之
（磯波中） 濑野源一

竹原あらゆる秘術を盡し敵をたほさんとせしも、相手仲々の剛の者、之又遂に引合となる。されど我が方に多少の勝味ありき。

○ 本校 川添桂藏
（鳥取中） 山内喬

川添始め勝味ありしも、敵勇を鼓しつゝ戰ふ折から、いづくに隙を見出せしか、遂にたほされしは實に殘念なりき。

○ 本校 西澤久一郎
（明倫中） 水野亮吉

西澤の早業流石の敵も困りけん。遂に西澤得意の巴投げを以て美事敵を屈服せしむ。

× 本校 須藤徳成
（開道會） 林源次郎

須藤得意の巴投げを以て頻りに敵の隙を伺ひて攻撃す。敵危地に陥ること屢々なりしかど、敵もさるものよく防ぎ遂に雌雄を決するに至らずして結局引合となる我が選手の試合はこれを以て終結を告げたれば、必勝し得ざりしを怨みつゝ八日午後歸彦せり。（須藤記）

滋賀縣教育會主催 武術大會出演之記

吾が校柔道部選手十餘名は劍道部選手と共に、眞野本多兩先生の引率の下に大正十一年十月二十二日膳所中學校に於ける滋賀縣教育會主催第七回武術大會に出演の爲、午前六時廿一分の列車にて大津へと向ひぬ。

此の日こそ一年一度の我が部の腕だめし膽だめしなる晴れの日なりき。今年は參加校増加せしため個人試合はなく對校試合のみなりき。我が校は第一回に膳所中學校と戰ひ第二回に八幡商業學校と戰ふ戰績左の如し。

今年は校友諸君の御後援と選手諸君の努力とに喜ぶ所なり。對校試合終りし後、各學校補缺選

午後一時半紅白勝負は終結を告げ紅軍の勝利となる兩軍よく戦ひ大差なかりしが、缺席者多かりしを遺憾とす、次に外來選手と本校柔道部選手との三本試合を行ふ。何れもよく戦ひ活氣ある、青年らしき選手らしき試合を行ひ大會の花と感せらる。左にその戰績を報せん。

○○(東小學校)	長川鐵太郎
×(東小學校)	武田助三郎
○○(彦根工業)	森藤次郎
○○(八幡商業)	中清水正男
○○(彦根工業)	高野瀬陳吉
○○(長濱農學)	橋山捨藏
○○(彦根揚武)	辻辻
○○(彦根警察)	横浦富三郎
○○(長濱農學)	西澤久之
○○(彦根揚武)	箕浦一郎
○○(彦根警察)	原田鶴一郎
×(長濱農學)	須藤徳外
	竹福
	賀見久之
	三進
	之吾

剣道

青年演武大會出演之記

×(八幡商業) 種村誠一
×(彦根揚武) 宮川瀬英二記

八月四日より京都武德殿に於て開かる、青年演武大會に出演せんとて、炎熱金鐵をも浴かず、嚴暑に屈撓せず、金龜城下に鐵腕を鍛へし彦成宮、諸先輩の叱咤激励の下に、流汗に白鹽を生せる稽古衣に身を堅め榮にある大會に異郷の敵を湖中に葬り、天晴月桂冠を永遠に金龜城下に飾らんものと堅き決心の色を浮べ、猛烈なる練習をし時機の到來するを待ちぬ。時は八月三日黎明校友諸君の熱烈なる歓呼の聲に送られ、城下の道場を後にして多大の希望を胸に湛へつゝ、西京に向ひぬ。明くれば、四日早朝一行は武運を神に祈りつゝ宿舎を出でぬ。朝議將に昇らんとして東天紅々、

容易に屈せず、遂に一本勝負となる。我が心はやれども劍意の如くならず遂に敵の毒刃に斃る。

○○(岐阜中學) 田井中牧男

田井中の働きこそ實に目覺しけれ。敵のため傷けられしも鮮な(籠手)にて一本を取り返し、茲に一進一退兩虎共に勝を譲らざりしが、我初陣の悲しさ、ベストを盡して奮闘せしも太刀先亂れ涙を呑んで退く。

○○(岡山閑谷中) 平田正信

兩虎の技伯仲の間にありしも、敵の旗色よろしからず。我先んじて「面」を取る。敵愈あせりて狂氣の如く、無二無三に打込み来る。我殘念至極なれども「小手」を譲る。茲に於て交戦數十合一上一々虚々實々火花を散らして奮闘せしも引分となりしは返すべくも殘念至極なり。

○○(德島中學) 赤松唯二

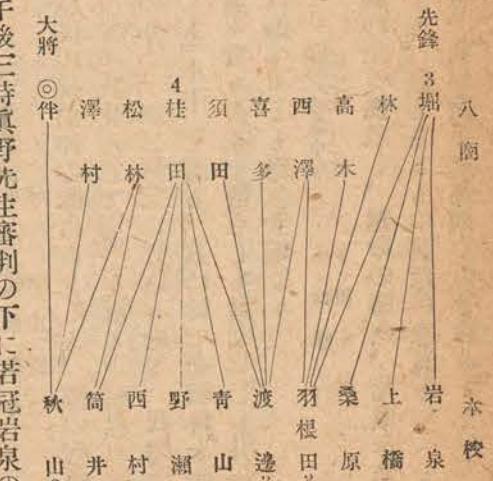
我れ先づ挑戦し、懸命の勝負、此處を先途と戦ひしも、敵もさるもの我新に意氣を加へて攻むれども、我が選手武運拙く恨を呑みて止む。

今年こそはさ校友諸君も多大なる期待を持つて居られたにも拘らず、斯くも悲惨なる不成績に終り諸君の期待に背き謝するに言葉を知らず。唯部員一同涙を流して謝するのみ。敗因に就いては改めて申すまでもなく我等の大將とたのみし中村、小堀二勇士の病魔の襲ふ所となり、涙を飲んで棄權せられしに因る。校友諸君と共に深く惜む所なり。尙夏季練習中盡力せられたる秋山君、成宮君の諸先輩に深く感謝すると共に、中村選手の電報にて我等洛陽に居る選手一同を激励せられしは深く謝する所なり。

八幡商業襲來之記

時は維九月三十日、天高く馬肥ゑ我等青年の内躍り腕鳴るの秋、突如八幡商業少年部選手挑戦し来る我何ぞ躊躇して止まんや。直ちに快く明年度選手を以て此に應じ本校道場に迎へ戦ひぬ。左に當日の戦況を記し校友會員の記憶に止めん。

試合は紅白三本抜勝負とする。



午後三時眞野先生審判の下に若冠岩泉の先鋒にて火蓋は切られたり。我が選手技に於ては敵に劣らざりしも、敵は元氣溢るゝ如く、飽くまで攻撃に出でたり。此に反し吾稍々呑まれ氣味にて敗れしは若手の通患無理もなし。上橋、桑原元氣よく戦ひたるも、初陣の悲しさ十分活躍する能はずして憤死せり。されど兩君の前途頗る有望、技術の研究と練磨に努力せられんことを望む。

羽根田選手敵の疲労甚だしきを見るや攻撃に攻

打ちこむ太刀は外れ劍先亂れ最後の奮闘振惜くも利かず無念の涙を呑んで萬事茲に休す。寛大なる校友諸兄!!願はくは選手の胸中を察し此の敗戦を御容赦下されん事を。

縣下演武大會出演の記

颯々の秋聲敗荷より出で、秋光天地に満ち、雲影日に薄くなるの時、滋賀縣教育會主催の演武大會は膳中に於て開かれぬ。意氣高く天を摩す剣道部選手は、此れを最終の遠征として、一學期の成績をも顧みず、九月より縣下の雄を我が蹄の下伏にせんものと猛練習をなし時の來るを待ちぬ。時は十月廿二日、眞野部長引率の下に勇ましき十數名の赤鬼健兒は、早朝金龜城を後にして膳所中學に向ひぬ。午前八時半大會は開始され、我校選手は各秘術を盡したり。いま當日の戦況を概記せん。

擊を重ね、易々として敵に兜を脱がしめ、我が慘死せる仇を報じ、續く林、高木の弱武者共を切つて落して意氣大いに揚りしも、西澤の毒刃にかかりて斃る。受け次ぐ渡邊初陣なれども赤鬼健兒の一分子、何ぞ敗を取るべき一騎當千の勇士西澤、喜多、須田を真甲に或は田樂差に拳も通れと突き立て、次なる桂田をも制し止めんと奮戦せしも、疲るゝこと甚だしく、太刀先亂れ、遂に敗を取る然れども君の奮戦振や實に目覺しきものあり。慢心することなく今後の自重自奮を期待す。青山、野瀬、西村、日頃練り鍛へし秘術を現さずして勝を豎子に譲りしは殘念至極。筒井立つや鮮かな小手にて暴れ狂ふ桂田を制し止め、松林と苦戦奮鬪せしも功を奏せずして止む。此の時我れ残るは大將一人、敵の殘兵や三人秋山塵殺せずば死すとも止まずと満身の勇を鼓し松林澤村の一卒を切り從へ、大將伴と交戦せしが、秋山疲るゝこと甚だしく切結び居るは面倒とや思ひけん、組討を試みしが勝負容易に決せず、恰も龍攘虎搏とも思はせし緊張した勝負。されど秋山は疲るゝばかりにして

本校選手日頃鍛へし秘術を盡せしも、師範はさるもの之れに屈せず、始め岩泉、野瀬共に鮮かなる面籠手にて敵に泥を塗りしも、後になるに従ひて我軍振はず。筒井、平田、秋山、中村あらゆる秘術を盡せしも、何等効を奏せず、敵に名をなさしめて萬事休す。

第二回 本校 対 ○松八商
岩 泉 ○松
○野 潤 ○松
○鹿 谷 ○桂 堀
村 波 筒 井 安
○根 田 ○大 岡
○藤 村 ○伴 田
○谷 井 岸 岩

○林 澤 村
○村 澤 村
○中 村 井 田

第一回戦に敗をどりし我軍は、第二回戦に遠來の恨ある八幡商業と雌雄を決する時となれり。「勝負は時の運なりとかや。苦戦に苦戦をなし先鋒は先づ戦死せしが、野瀬は易々として猛る敵軍を蹴せり。羽根田、鹿谷善戦し、甚だ我軍優勢なりしが、神は飽くまで我後軍に味方せず、嗚呼何たる惡運の我軍よ。三つの敵首を戈の先にあげ、甲の緒をしめ奮戦に奮戦せしも其の効なく遂に止む。

後記

師範八商の兩對戦に無惨なる最後を遂げ、校友諸君の期待の萬分の一をも報ゆるを得ざりしは、選手一同慚愧に堪へざる所なり。顧みれば本年度の敗陣の原因は、全く我等が平素練習の不充分によるものにして、實になげかはしき次第なり。尙當日田井中は負傷のため、又平田は第一回戦に負傷したる爲止むなく出演し得ざりしは諸君と共に惜しむ所なり。今年は僅か五點を得しのみなりしは

實に殘念至極な次第なれど、優秀なる來年度選手諸君の花々しき活躍振を期して校友諸君の御寛容あらん事を切に希ふ。

行幸 武道大會之記（剣道部）

天高く氣澄める、十一月十三日此の日こそ、五歳の昔湖東の原野に大演習の舉行せられし際吾が校は大本營行在所と指定せられ畏くも陛下御駐輦あらせられたる日なり。此の千載不遇の慶事を紀念せん爲、吾が校に於ては紀念式を擧げられ式後直ちに道場に於て武道大會開催せられたり。肉躍り腕鳴りて、勇氣凜烈たる、我が金龜六百の健兒は、日頃鍛へし鐵腕を示さんと、奮戰力鬪したるは誠に勇壯にして日覺しかりき、當日の剣道紅白一本抜勝負左の如し。

紅軍
山本(捨)
木村(龍)
佐藤(藤)
前川
松本(久)
白軍
西居
佐藤(寛)
麻生

内藤	田	3西村(浅)	3水野(政)	櫛北	後閑	竹腰	須	那安	達	廣瀬(義)	上田(周)	北川	西濱	田中(小)	近藤	米澤	河村(勇)	小澤	前川	
×				田村	田村	田村	田村	上林(忠)	江龍	朝日奈	北川	北川	北川	北川	田村	木林	吉川(弘)	小川(信)		
柳原	高崎	岡崎	原田	3西村(浅)	3水野(政)	櫛北	後閑	竹腰	須	那安	達	廣瀬(義)	上田(周)	北川	西濱	田中(小)	近藤	米澤	河村(勇)	小澤